2025年5月11日 上毛新聞掲載

館林紬の魅力発信

機織り体験、交流の場に

あす館林にオープン ツムギトエンガワ

館林市の伝統的な綿織物、館林紬（つむぎ）の再興に取り組む地元有志の合同会社「紬・組」は12日、同市仲町の古民家を改装し、地域の交流拠点や機織り体験の場としての機能を備えた施設「ツムギトエンガワ」をオープンする。館林紬の魅力を発信し、将来的な生産復活に向けた足掛かりとする。当日はオープニングイベントを予定しており、関係者は「気軽に来場を」と呼びかけている。

紬・組は2023年に発足。館林紬は現在は生産されておらず、在庫を唯一扱っている山岸織物（同市）が所有する築120年の住宅を借り受けて、新施設を整備した。

紬・組の代表社員3人が約1年かけて、DIYで内装のほぼ全てを作り上げた。以前の構造を極力残しつつ、地域に開かれた場所にしようと、住宅南側に縁側のようなスペースを用意し、来場者の交流の場とした。今後は西側にも同様の施設を整備する。

高崎市や埼玉県などの事業者から寄付を受けた手織り織機など計4台の織り機を設置。ワークショップの参加者に手織りを体験してもらい、生産復活に向けて魅力を発信する。紬・組の活動の中心拠点にもなる予定。

紬・組は「日日凛（にちにちりん）」と名付けたシンボルのしま模様を活用したネクタイや手ぬぐい、文房具といった製品を市内の事業者と連携して開発、販売している。ともに代表社員の安楽岡紀子さん(48)は生産復活に向け「紬に関わってくれる人を増やしていきたい。紬を中心とした憩いの場になれば」と期待し、飯塚はる香さん(35)は「千年の伝統を次の千年につなげ、館林紬を産業化したい。ビジネスの拠点機能を持たせ、この場所から紬の輪を広げていく」と意気込んでいる。

イベントは午前10時～午後4時。織り機を使った機織り体験や綿花を使ったワークショップ、新商品のクッキーをはじめとする関連商品の販売を行う。コーヒーなどの飲料や軽食を販売するキッチンカーも出店する。

（平山舞）

ロゴマークを持ちツムギトエンガワを紹介する（左から）飯塚さん、安楽岡さん